

第2回『森の広場』市民観察会
観察ガイドブック



2006.9.10

主催： 森の広場市民観察会実行委員会 (青森市内8団体参加構成)
共催： 新城縁故者委員会、青森市内俳句会
後援： 青森市、東奥日報社、NHK青森放送局

主催8団体：「青森の自然環境を考える会」「ウォッチング青森」「草と木の会」「樹木医会」「青森野鳥の会」
「森林インストラクター会」「青森自然誌懇話会」「やぶなべ会」 (順不同)

秋・森の広場 によろこそ！

「秋の鳴く虫・草花」観察会

春の集いに引き続き 秋の「森の広場市民観察会」を開催します。
今回のテーマは『秋の鳴く虫・秋の草花』…昆虫は現物展示もします。

虫の声を聴きながら、秋の野山を散策してみませんか。
また、俳句会の方にも参加いただき 併せて吟行会も行います。

■ 「第2回森の広場市民観察会」次第

- | | |
|--------------|--------|
| 1. 受付 | 13:30～ |
| 2. オリエンテーション | 14:00～ |
| 3. 観察会と吟行 | 14:30～ |
| 4. まとめ | 16:30～ |
| 5. 解散 | 17:00 |

「森の広場」設置の経緯

太平洋戦争後、合浦公園に建設された市営競輪場の郊外移転に選択されたのが新城財産区所有の森林地帯でした。当時新城財産区から譲り受けた森林約53haの内、競輪場建設に要した22haの残存森林の利用法として考えたのが「スポーツその他の多目的広場」だったようです。名称は「森の広場」とし、管理棟、研修室、トイレなどの他、野球場、ゲートボール場などを林野庁補助事業である「生活環境保全整備事業」で整備したもので、管理運営は青森市生涯学習課スポーツ振興チーム所管の施設となりました。しかし、残念ながら利用者は野球同好者だけで、他に山菜採りの人が訪れる程度だったため、周辺の手入れも疎かにされ、せっかく整備したミズバショウ観察路も崩落したままになっています。地元新城の住民ですら知らない場所で長い間眠った状態の施設でした。

この度の青森市内自然愛好諸団体の合同観察会をきっかけに一般市民への啓蒙を計り、将来的には「青森野草園」をも視野に入れた運動に発展できればと考えております。

遊歩道だけは毎年管理を委託されてきた「新城財産区縁故者委員会」の皆様により刈り払いが行われ、歩きやすく整備されております。四季折々の森林浴や草木の観察ルートとしてご利用下されば今回の合同観察会を企画した関係者一同の喜びでもあります。

市民観察会スタッフ一同

昆虫 (1)



ヤブキリ (キリギリス科)

緑色・大型のキリギリスです。樹上性のキリギリスで森の広場でも遊歩道周辺の葉上で休んでいる姿がよく目に付きます。幼虫時代はヨモギの上などでも見られますが成長するにつれて林の中に移動していきます。前・中脚の脛節には刺があり、他の昆虫を捕らえて食べる習性があります。鳴き声はツシー、ツシー、ツシーと澄んだ音色で鳴きます。(表紙画像もヤブキリです。)



キリギリス (キリギリス科)

採草場が広く有った昭和初期には、青森市の郊外では普通に鳴いていました。しかし、採草場が無くなり、丘陵地帯の開発が進み一時鳴き声を聞くことはありませんでした。しかし、最近縄文丸山遺跡内では復活なのか放虫なのか増えつつ有ります。画像の個体も三内丸山で昨年(2005年)撮影した個体です。「チョン、ギース」と日中長閑に鳴きます。



ヒメクサキリ (キリギリス科)

緑色型と褐色型があります。やや湿った草原に住み、「ギー」と連続した高い鳴き声です。聴力の弱った方には聴き取れないかも知れません。顔は尖ってスマートな体型ですが飛翔して逃げるよりは草むらの中に潜り込んで逃げます。キリギリス科の昆虫は捕まえられると噛み付く習性があります。大型種では要注意でしょう。



ヒメギス (キリギリス科)

キリギリスを一回り小型にした2cm前後の黒褐色のキリギリス、前胸側面後縁に白色帯があります。日当たりの良い葉上で見られます。翅の長さが腹部末端をはるかに超える長翅型と殆ど発音器だけの短翅型(コバネヒメギス)、腹部と同じくらいの普通型があります。また、前胸背面が緑色タイプと褐色タイプがあります。鳴き声は「シリリリ」と聞こえます。

昆虫 (2)



エゾツユムシ (キリギリス科)

ヤブの中に棲んでいるやや華奢なキリギリスの仲間。脚が長く、長い後肢と長い翅があるので軽々と飛翔します。鳴き声は「ツー、ツー、ツキチッ」と鳴くとされていますが周波数が高いため老化した耳では聴き取れない様です。同じ環境に「アシグロツユムシ」もいます。かつては青森市街地の鉄道防雪林などに近似種の「セスジツユムシ」もいました。



カンタン (コオロギ科)

青森市の郊外では最も普通に聴かれる鳴く虫の代表格です。しかし、南へ行くにしたがって山地の虫になります。「ルルルル…」と可憐な美声で連続的に鳴きます。鳴いている姿は草の上なので発見は出来ます。しかし、葉っぱに開いた穴などから顔だけ覗かせて鳴いています。クズの葉裏などをひっくり返すと2cm程度の白い可憐な虫体を見つけられます。



エンマコオロギ (コオロギ科)

コオロギ類では大型種でどこにでも住んでいますので「スズムシ」のようにわざわざ観賞用に飼育する習慣はありません。鳴き声は力強く高らかに響き渡る美しい音色を出します。しかし、♀が接近するとやや低く最後の音が「コロコロリーリー」と誘いなきに変わります。幼虫時代は腹部背面に白線が表れますので他種コオロギと容易に識別できます。



タンボオカメコオロギ (コオロギ科)

体長20mm前後の比較的小型の黒いコオロギです。近似種にハラオカメコオロギがいます。草むらの小さな石の下にトンネルを掘って♂♀仲良く入っていたりします。鳴き声は♂単独の場合はリッ、リッ、と一晩中鳴いています。♀と一緒に時はリー、リーと低音で長く伸ばします。コオロギ類は一般に♂単独の場合は高く、♀と一緒に場合は低く長く延ばして鳴きます。

昆虫 (3)



マダラスズ (コオロギ科)

体長10mmにも満たない小さなコオロギです。背の低い草むらの中で、「ジー、ジー」と間をおいて同じ長さで鳴いています。後肢の腿節に黒白の斑模様があります。小さい割には大きい鳴き声です。近似種にカワラスズがいますが鉄道線路の石の間で「チリチリ…」とせわしなくなかなかの美声で鳴いています。駅のホームに立てば聴けるでしょう。



シバズ (コオロギ科)

マダラスズ、ヤチズ、シバズの3種は体長5～6mm程度の小さなコオロギ、しかも、その鳴き声は「ジー」と言う音が基本でその鳴き声が規則的だとか長いとか区別は難しいです。成虫を見てもマダラスズ以外よく分かりません。シバズは小腿髁の先端節は黒いので虫眼鏡で区別できます。ヤチズと区別は非常に難しく、私にはよく分かりません。



トノサマバッタ (バッタ科)

一部に裸地も有るような明るい草原に棲み、人が接近すれば飛翔して逃げる大型のバッタです。前胸背板の色が緑色から黒褐色まで色々な個体があります。♂は後腿節と翅を擦り合わせて「キシキシ」と音を出すことが出来ます。普通、樹林地帯には生息せず、森林が伐採されて一部に裸地が生じると真っ先に現れ、植生の繁茂に伴っていなくなります。



クルマバッタモドキ (バッタ科)

トノサマバッタよりは小型ですが、飛ばば後翅の模様が美しいバッタです。緑色型と褐色型の2型があります。やや乾燥した小さな空き地にも棲んでいます。前胸背にX形の淡色斑があります。発音の仕方はバッタ科共通の後肢と翅を摺り合わせて「キシキシ」と音を出します。森の広場では遊歩道やゲートボール場で見られます。

昆虫 (4)



ヒナバッタ (バッタ科)

小さな空き地でも見られることが多く乾燥した草原を好み良く飛翔するので一見捕獲が難しいようですが、1回の飛翔距離は比較的短く、4～5回連続して追いかけると疲労して飛べなくなりますので素手でも捕獲できます。♂は脚と翅を摺り合わせて「シュル、ルル」と発音させます。前胸背に1対の<字型の細条があります。後翅は殆ど透明です。



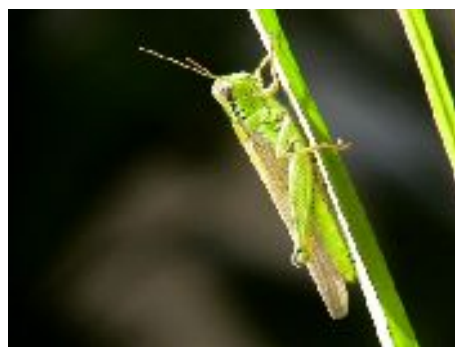
ミカドフキバッタ (バッタ科)

体長25mm程度の翅の無い(♂♀とも退化した短い痕跡的翅はある)裸で緑色のバッタです。草むらの葉上で見られます。産卵期には土の路上で腹部を差し込んで産卵している♀成虫が良く目に付きます。類似した種が数種あり、八甲田など高山に棲む別種も知られています。ジャンプ力があまり強くはないのですが、ヤブの茂みを逃げ回ります。



コバネイナゴ (バッタ科)

♂の体長23mm前後、♀は少し大きく、水田周りの草むらに普通です。翅は腹端より短く飛翔距離は1～2m程度。「イゾイナゴ」と呼ばれた時代もありましたが、低温地帯では体型が変わっていたようです。小学生に捕獲させて佃煮に加工した時代もありました。現在でも珍味として販売されています。染色体の螺旋構造の観察に本種の精巢が利用されたこともありました。



ハネナガフキバッタ (バッタ科)

コバネイナゴよりはやや大きく飛翔力のある緑色のバッタです。♂では複眼から前胸背側縁にかけて顕著な黒色帯があります。幼虫時代はフキ、ヨモギの等の葉上に群がって葉を食べます。フキの葉が穴だらけになっているのはこれらフキバッタたちのせいです。葉上に群がっている時代の幼虫はヤマメ・イワナなどの溪流釣りの餌に最適です。

昆虫 (5)



オンブバッタ (ヒシバッタ科)

♂は25mm前後で小型ですが、♀は40mmを越すほどの大きさの差があります。透明な後翅があります。あまり飛翔することなく動きは活発ではありません。軽量の♂を乗せていても負担を感じないのか♂を背に乗せたままにしていることが多く、オンブバッタの名称の由来になっています。普通緑色ですが、汚褐色の個体もいます。



オオカマキリ (カマキリ科)

体長70~95mmの草綠色または黄褐色でふっつうに見られます。性格は攻撃的で捕獲しようとする鎌状に特化した前脚を平らに構えてさらに翅を立てて威嚇します。三角形の頭は良く動き、獲物の動きに合わせて見つめます。卵塊はスポンジ状の断熱材に覆われてススキなどの茎に付着させています。卵塊の高さと積雪深が関係するという話もありますが定かではありません。



アキアカネ (トンボ科)

赤とんぼの代表格のトンボです。羽化するのは夏の初めて、羽化後は山地に移動して性成熟する頃腹部が赤く変色して里へ下りて産卵します。未熟時代は黄色いトンボです。産卵は♂に繋がったまま浅い池などで行われます。一時的に出来た水たまりにも産卵しますので、一時的に出来た水溜まりでも水が涸れなければ突然ヤゴが発生することもあります。



ノシメトンボ (トンボ科)

羽化する時期はアキアカネと同じ頃ですが、羽化後は付近の林地に滞在していますので郊外の森林地帯ではノシメトンボの密度が非常に高まります。アキアカネの様に赤く変色せず黒色部が多い黄色のトンボです。翅の末端が褐色で「クルマトンボ」とも呼ばれていました。捕獲すれば卵を産みますのでコップなどでも孵化の観察が出来ます(冷蔵後)。

昆虫 (6)



オオアオイトトンボ (アオイトトンボ科)

メタリックグリーンの大型のイトトンボで、止まる時翅を斜めに開いた状態で静止します。産卵は岸边に張り出した特定の小枝に集団で産卵する習性があり、観察記録によると特定の枝にペア個体が続々と集結して夜通し産卵が継続するそうです。羽化後は水辺を離れて森の下草で見られることが多く、近似種に「アオイトトンボ」もいます。



オオルリボシヤンマ (ヤンマ科)

オニヤンマに次ぐ大きなヤンマで水辺に降りると池のまわりを巡回する瑠璃色の♂、水草の間で産卵する黄緑色の♀が見られるでしょう。近似種に殆ど同じ大きさの「ルリボシヤンマ」がいますが胸の斑紋が僅かに違うだけなので捕らえるか、すぐ近くで産卵してくれなければ見分けは付きません。「ルリボシヤンマ」は比較的小さな池にいます。



ギンヤンマ (ヤンマ科)

広い水辺を巡回する美しいヤンマで皆、憧れのヤンマです。羽化したばかりの新鮮な個体は「空飛ぶ宝石」と表現したくなるような美しさがあります。水面の見えるような広い池の上に日中現れます。近似種に「クロスジギンヤンマ」がいます。森の広場では春に羽化した「クロスジギンヤンマ」の殻が岸边の枝にたくさん見られます。



オニヤンマ (オニヤンマ科)

日本最大のトンボで里山に普通です。林道脇の細流が繁殖場所なので遊歩道でも♀を求めて巡回飛行する黒・黄色斑の大きなトンボが見られると思います。餌の虫を捕らえたときには路端の草にぶら下がって止まって食べる習性がありますので身近に見られることもあります。幼虫は湧き水の流れる細流で泥の中に顔だけ出して潜っています。

植 物 (1)



キンミズヒキ (バラ科)

高さ30~80cmの多年草。細長い花穂を金色の水引に見立てて名がある。円錐状の瘦果はカギ状の刺があり、秋、人にもっともくつつく。止血剤の生薬として利用される。



クズ (マメ科)

日本各地に分布し、東~東南アジアにも広く分布するツル植物。秋の七草の一つ。根には大量のデンプンが貯蔵されており、これからクズ粉を採る。マメ科植物なので痩せ地にも生育し、牛馬を飼育していた時代は優秀な飼料であり、ツルは薪の結束に用いられた。また茎の繊維からは葛布も織られ、根からの葛粉の採取など、利用価値は高かった。



ヌスビトハギ (マメ科)

日本全土の平地から山地の草地や道端、林縁などに生える多年草。ハギの名を冠しているが、果実の形態が分裂果なのでハギ属ではなくヌスビトハギ属という別属に分類されている。似た仲間に変種のヤブハギがある。豆果の表面にはカギ状の毛が密生し衣服にくつつく。和名は、泥棒が足音がしないように足の裏の外側を使って歩く足跡に豆果が似ているのことに由来。



ヤマハギ (マメ科)

高さ2m位に達する半低木。秋の七草の一つで、山野に最も普通にあるハギ。万葉の時代から多くの歌に読まれている。止血作用がある。

植 物 (2)



ツリフネソウ (ツリフネソウ科)

全国に分布し、半日陰の湿った場所に生育。花弁は3枚で、上側に1枚、下側の2枚は左右に広がっている。下側のは大きく、一部が管状になって距を形成し、渦巻き状となっている。距の中に蜜が入っていて、マルハナバチがこれを目当てに集まってくるという。果実は熟すと勢いよくはじけ種がばらまかれる。和名は、帆掛け舟を吊り下げたように見えることに由来。



ススキ (イネ科)

カヤ、オバナとも呼ばれ、秋の七草の一つ。花は8月頃から咲き始め、はじめは花枝は横に開いているが、やがてすぼんで尾状になる。かつては茅葺屋根の材料に用いたり、家畜の餌として利用することが多かったため、集落の近くに定期的に刈り入れをするススキ草原(茅場)があった。植物遷移の上から見れば、ススキ草原は草原としてはほぼ最後の段階に当たる。



ミズヒキ (タデ科)

高さ40~80cmの多年草。熨斗などに懸ける紅白の水引が名前の由来。花弁に見えるものは萼であり、長い期間、花が咲いているように見える。茶花として利用される。



ノコンギク (キク科)

本州から九州に生育する多年草であり、山野に最も普通の野菊である。人家の周りによく植えられるコンギクはノコンギクから導かれた園芸品種である。和名は、野山で普通に見られ、花の色が淡紺色、花の形が「菊」であることに由来するが、白色に近いものも多い。

秋の季語

秋の『森の広場市民観察会』で出会えそうな、季語となっている生き物を歳時記より一部抜き出してみました。(括弧内は読みと別称。)

赤蜻蛉(あかとんぼ/あきつ・赤蜻蛉・秋茜)

蟋蟀(きりぎりす/ぎす・機織)

螞螂(かまきり/たうらう・鎌切・斧虫・いぼむしり)

蟋蟀(こおろぎ/蛭・こほろぎ・ちちろ・ちちろ虫)

飛蝗(ばった/はた螽・きちきち・きちきちばった)

鈴虫(すずむし)



通草(あけび)

葛(くず)

茸(きのこ/菌・舞茸・ひら茸)

萩(おぎ・はぎ)



露草(つゆくさ)

あなたも俳句を創ってみませんか？

.....

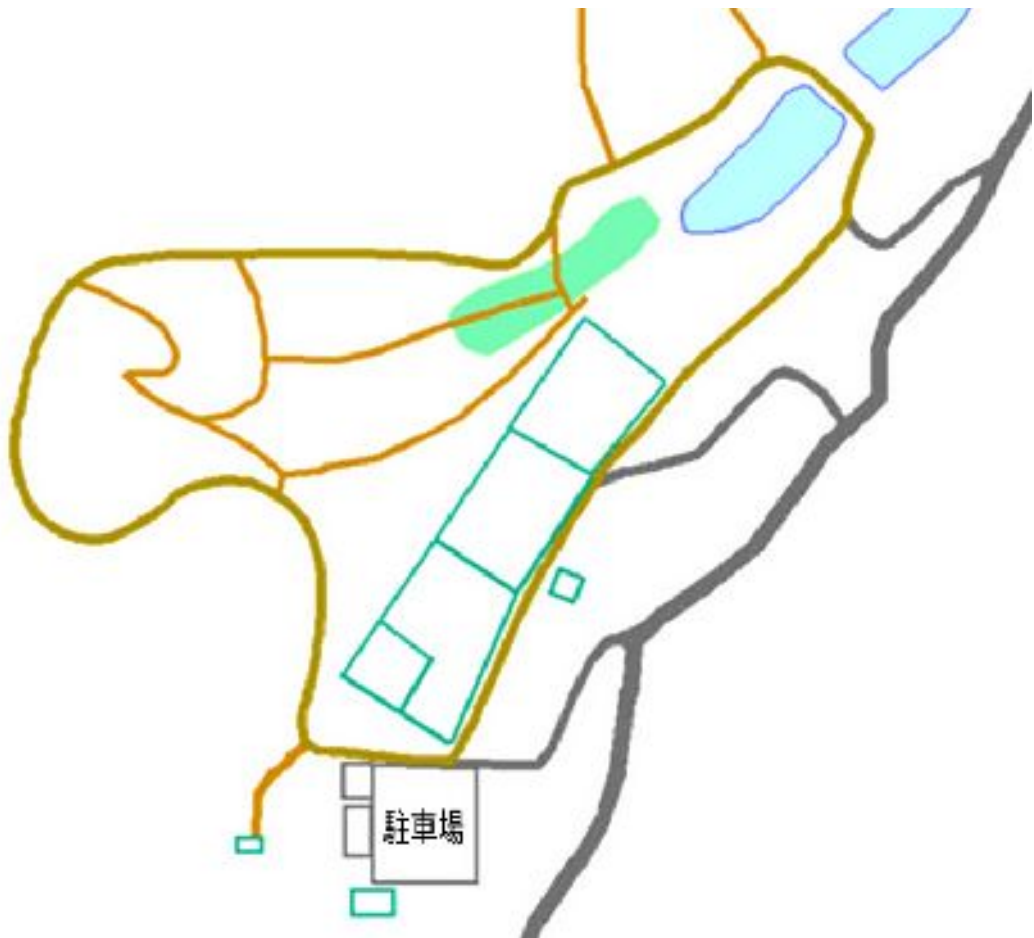
.....

.....

.....

.....

森の広場観察路略図 (『森の広場』で観察した事柄を略図を利用して記録しましょう。)



ガイドブック制作: 自然を見つめる やぶなべ会 (2006.9.10)